

執筆者紹介（五十音順）

戒能 通弘（かいのう みちひろ）

同志社大学法学部教授。専門は、近代イギリス・アメリカ法思想史。

担当：序章・1章・4章・8章・9章・10章

業績：『世界の立法者、ベンサム』（日本評論社、2007年）、『近代英米法思想の展開』（ミネルヴァ書房、2013年）、『ジェレミー・ベンサムの挑戦』（共編著、ナカニシヤ出版、2015年）、『法の支配の歴史』（編著、ナカニシヤ出版、2018年）、『イギリス法入門』（共著、法律文化社、2018年）、『功利とデモクラシー』（共訳書、慶應義塾大学出版会、2020年）など。

神原 和宏（かんばら かずひろ）

久留米大学法学部教授。専門は、近代フランス法思想史。

担当：5章・6章

業績：「ルソーの共和主義解釈——ルソーと近代法思想」（『法哲学年報』、有斐閣、2007年）、「ヘーゲル承認論とルソー」（『法の理論31』、成文堂、2012年）、『転換期の市民社会と法』（分担執筆、成文堂、2008年）、『はじめて学ぶ法哲学・法思想』（分担執筆、ミネルヴァ書房、2010年）、『市民法学の新たな地平を求めて』（分担執筆、成文堂、2019年）など。

鈴木 康文（すずき やすふみ）

桃山学院大学法学部講師。専門は、近代ドイツ法思想史・法制史。

担当：2章・3章・7章

業績：「19世紀ドイツにおける立法をめぐる思想」（『修道法学』37巻2号、2015年）、「19世紀プロイセン裁判所における法形成——書面による方式主義を題材に」（『法の理論34』、成文堂、2016年）、「19世紀前半における判例についての覚書」（『修道法学』40巻2号、2018年）、「ヴィルヘルム・アルノルト（Wilhelm Arnold, 1826-1883）について」（『桃山法学』32号、2020年）など。